

重伝建を中心市街地に持つ稀有な中核市 市制100年に向けた多彩なまちづくり！

重伝建20周年と市制施行100周年

《小江戸・川越》の愛称で知られる埼玉県川越市は昨年12月1日、小江戸の愛称のゆえんであり、象徴ともいえる中心市街地「一番街とその周辺(約7・8ha)」の「重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)」選定(平成11年12月1日)20周年の節目を迎え、記念シンポジウムなどの関連事業を住民との協働で開催した。重伝建選定記念日の12月1日は、偶然にも川越市が98年前の大正11(1922)年、埼玉県で初めて認められた市制施行の記念日、「市民の日」とも重なる。かくして2年後(令和4年=2022年)の12月1日、川越市は市制施行100周年の大きな節目を迎える。

川越市ではそれに先駆け、今年4月末に「川越市市制施行100周年記念事業基本構想」を策定。令和3年1月1日から12月末日までをPR期間に、令和4年1月1日から12

月末日までを記念事業期間にする旨を発表した。今年はその準備期間として「キャッチフレーズ・ロゴマーク募集」や「記念事業のアイデア募集」などを、市民および市内在勤者・在学者などの関係人口を対象に広く呼び掛けている。

ところで、現在の区域による埼玉県が発足したのは明治9年だ。それ以前から、川越町(当時)は既に県南西部の中心都市になっていたとはいえ、なぜ県庁所在地(当時は旧浦和町)よりも先に、市制施行されることになったのだろうか？

「それは当時の埼玉県内において、川越町が最も繁華な商業地だったからです。商業地としての川越の繁栄は、江戸時代の旧川越藩から続く伝統でした。川越は新河岸川の舟運を活用した物資の輸送などにより、大消費地・江戸と常に直結していたため、経済的にも文化的にも江戸と密接な関係にありました。付随して、荒川・入間川などの河川、伊

かわいよしあき
川合善明
川越市長



佐沼などの池沼の豊富な水源を活用し、農業生産地としても繁栄しました。ヒト・モノが行き交う生産・物流の拠点だったのです。そうした事情はおおむね、現代も同様です。

例えば都心部から30km圏内にある川越市の商業地、観光地、住宅地としての立ち位置。常に県内上位の農家戸数・耕地面積を維持する農業生産地、県内最大級の出荷額を誇る、モノづくりのまちとしての繁栄。鉄道、高速道路、国道16号や254号などの充実した道路網による物流の好適地とし



慶安元年(1648年)に藩主松平信綱の奨励で始まった恒例の川越まつり

ての現況など、さまざまな面に継承されているのです」
 平成21年2月に就任後、現在3期12年目を迎えている川合善明川越市長のこの言葉には、川越市の伝統的かつ多彩なポテンシャルの数々が、まさに凝縮されている。
 川越市は全国に120カ所(令和2年7月現在)ある重伝建地区の中で、東京都心部から最



川越市の中心市街地にある重伝建地区の中心・一番街

も近い、というより、ほぼ隣接する唯一の存在だ。徳川家康の江戸入府以来、川越には江戸の北西の守りを担う重要拠点として川越藩が置かれ、舟運用に整備された新河岸川の存在とともに、中山道とつながる幹線道・川越街道(国道254号)などを通じ、江戸と関東甲信越地方などをつなぐ人流・物流の結節点として大いににぎわった。
 関東の要としての川越の地理的特性を見抜き、城下町としての基礎を最初に造ったのは室町時代の武将・太田道灌だが、川や池沼が豊富な低湿地に鳥獣が多く生息した川越は鷹狩りの好適地で、徳川家康・秀忠・家光もし



さらに、重伝建に選定(種別は《商家町》、選定要件は《伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの》)されるような歴史的遺構の多い地区が、観光地・川越の原動力になっているというだけではない。そこが現在も中心市街地として機能しているところに、重伝

豊かな歴史遺産と歩む 都市の課題と喜び

ばしば来訪した。歴代の藩主を酒井氏、堀田氏、松平氏など有力な譜代大名が勤め、大老や老中が多く輩出された。
 そうした背景も含め、川越は城下町としても商業地としても、圏域をけん引する中核的位置付けが近世からなされ、ひいては大正11年の埼玉県内初の市制施行にもつながってくる。



蔵造りの建物と並ぶ重伝建地区のシンボル「時の鐘」



江戸末期に建てられた川越城本丸御殿は高知城と並び、全国に2棟しか現存しない本丸御殿



3代将軍・徳川家光とその乳母・春日局にゆかりのある喜多院は川越を代表する寺院の一つ(多宝塔)

775万人(令和元年・入込客数)もの観光客が訪れる人気観光地の座を維持し続けているわけだが、こうした歴史的・観光的に優れた街の構造が、前述のように深刻な交通渋滞を生み出す要因ともなった。

「川越市における重伝建選定までの道のりは、重伝建の制度が開始された昭和50年代初頭から始まりました。まず伝統的な建物を詳細に調査し、蔵造りの商家を市の文化財に指定。地元商店街を中心に『町並み委

建のまちとしての川越市の魅力と独自の個性がある。同時にそのことが中核市(平成15年)として圏域をけん引する責務も有する現代都市・川越市にとっては、大きな課題の要因にもなっている。その課題とは、後に述べる交通渋滞だ。

川越市の重伝建地区は江戸時代を通じて構築された町割が濃厚に維持されているが、実は江戸時代初期の寛永15(1638)年の大火で城下町の3分の1が焼失している。そこからの再建によって城下町としての構造はより確固たるものになっていくのだが、明治時代にも何度かの大火に見舞われている。とりわけ被害が大きかったのは明治26(1893)年

の『川越大火』だ。その際も商業地を中心に、町の3分の1が焼失した。そこで盛んに造られるようになったのが、重伝建地区の特徴でもある耐火性を意識した蔵造りの建物だ。一方、第2次世界大戦の空襲などによる戦火は免れている。

こうした経緯を経て、川越市の町並みは、江戸時代の町割を基盤に、旧川越城の本丸御殿や喜多院をはじめ多くの寺社が形成する江戸時代の伝統と格式に、蔵造りが象徴する明治・大正のモダンな意匠が混交する、独特な雰囲気醸し出すに至った。

加えて都心から30km圏内、池袋から鉄道で30分というアクセスの良さなどから、年間

員会』が発足され、平成4年には中心市街地の一番街で電線地中化も実現しました。さらに重伝建選定の前段階として、平成10年に『川越市伝統的建造物群保存地区保存条例』を制定。翌11年に川越市川越伝統的建造物群保存地区および中央通り線の縮小変更の都市計画決定。同年に、国の重伝建に選定されました。このように、四半世紀もの期間をかけて着々と進め、成就した計画でした。

しかし、重伝建選定を受ければ当然、中心市街地での道路の拡幅は不可能です。江戸時代初期以来の町割ですから、車道は2車線の確保がやっと。電線地中化などの整備は進められましたが、運動を開始した当初は、ここ

まで車両の数が増えるとは予測できなかった面もあるのかもしれない」(川合市長)

環状道路がもたらす 渋滞緩和への光明

川越市を巡る交通の概況をここで改めて整理する。まず鉄道は東武東上線、西武新宿線、ＪＲ川越線の3路線11駅が市内に立地する。さらに鉄道5社による相互直通運転が平成25年に開始され、首都圏のベッドタウンとしての利便性は飛躍的に高められた。道路網は関越自動車道(川越IC)と国道254号(川越街道)が南北の軸、国道16号が東西の軸の役割を果たしている。そこへ平成27年に埼玉県



昨年12月に開催された重伝建選定20周年の記念シンポジウム

内の全区間が開通した圏央道(首都圏中央連絡自動車道)が加わる。圏央道の他県の残り区間が近々開通すれば(当初予定は本年全通)、横浜・厚木・八王子・つくば・成田・木更津などの都市とも直結。ひいては東名高速道、東北自動車道、常磐自動車道などとも間接的に連結することになる。

このように他県や他都市と川越市をつなぐ大動脈としての道路網は着々とつながっていくのだが、川越市内に入ってからからの中心市街地の道路がその分、随所でボトルネック状態になり、渋滞してしまうことになった。こうした事態の解決に向けた方策は、重伝建指定と中央通り線(一番街部分)の計画幅員の縮小を契機として、さらに進められることとなる。

まず実施したのは車を中心市街地の外に止め、内側では公共交通(バス)を活用するパーク・アンド・ライド交通実験や、自転車を併用するパーク・アンド・サイクル交通実験などだ。同時に地元自治会等との交通円滑化に向けた協議や、埼玉大学との共同研究、交通社会実験の実施などを並行して進めた。そうした過程で福音となることが期待されたのが、川越北環状線(県道160号)整備の進捗(しんちよく)だった。

川越市の中心市街地東側には国道254号が、南側には国道16号が通り連絡している。川越北環状線(全長5.5km)は国道254号と中心市街地の北側(福田交差点)で結ばれ、南側(脇田新町)で国道16号と結び、合わせて

ひし形のような形を描きつつ、中心市街地の周囲を巡る都市計画道路だ。平成元年の当初の計画では、おおむね20年後に全線開通の予定だった。

ＪＲ川越線および東武東上線と交差する部分の「高架化」か「地下化」に関して、地元との合意形成に時間を要したが、多くの課題も一つずつ克服されていき、約30年の期間を経て、昨年3月について全通。既に交差点での渋滞の軽減化、移動時間の短縮などの効果が出ているという。特に物流を担う大型車の北環状線への迂回(うかひ)が目立つという現況報告は、中心市街地の渋滞緩和の課題解決に向け、大きな光明といえるだろう。

「ただ理想的には、全ての区域で4車線化が実現すれば、北環状線の効果はさらに大き



交通渋滞緩和と観光振興のカギになるパーク・アンド・サイクル



今年6月にオープンした複合施設「ユープレイス」と3階の市民サービスステーション

くなると思うのですが、2車線区間（小室（脇田新町）がまだわずかに残されています。今後は埼玉県と協議を進めながら、2車線区間の4車線化を少しでも早く実現していくことで、市民や観光客の皆さまはもちろん、物流など各種商用で川越市を拠点にしてくださっている方々などにも、より使い勝手の良い交通ネットワークが実現するものと大いに期待しています」（川合市長）

重伝建地区が中心市街地に含まれる川越市ならではの重要課題の一つである交通政策に関して、このように常に試行錯誤を重ねながらも、懸案の解決が着実に図られてつつある。そして、こうした都市構造的な諸課題の解

決に向けた努力とともに、川越市が持続可能なまちづくりの構築に向け、最も力を傾注している施策の一つが、各種の子育て支援事業だ。

便利な駅近で展開される 各種子育て支援

「私は平成21年の市長就任以来、12年間で市内保育施設の定員を約3千人分増やしました。待機児童は平成21年4月の173人が平成31年4月では20人になっています。保育施設の定員を3千人分増やしても待機児童がまだ残っているのは、この12年の間にも人口が約1万5千人増えていることや、子育て世代の社会増が一定の割合を占めているのと同時に、子どもを預けて働こうとする意欲を持つ女性が、年々増えていることなども影響しているといえます。

また市制施行以来、ほぼ毎年増え続けてきた本市の人口は、平成27年から続いている現在の35万人台がピークではないかと予測しています。しかし、働く女性がさらに増えることを考慮すれば、待機児童問題を解消するための努力は、さらに続けていく必要があります。

同時に本市の人口については、現在の35万人台をなるべく長く維持することを一つの目標にしています。それだけに、子育て世代の市民が安心して子育てできるまちの実現に向けた各種の支援策は、切れ目なく、多角的に心掛けていく必要があります」（川合市長）



持続可能なまちづくりの要は各種の子育て支援

川越市の「安心して子育てができるまちづくり」の事例は、例えば川越市内11駅の中で利用者が最も多い川越駅（東武東上線・JR川越線）西口駅前再開発の一環として今年6月にオープンしたばかりの、11階建て複合施設「ユープレイス」3階に設置された、川越市民サービスステーションの在り方にも垣間見える。

同ステーションには住民票などの各種証明書の発行や戸籍関連の届け出、市税収納などを行う「川越駅西口連絡所」、高齢者や障害のある人、子育て中の人から生活困窮者に至るまでの相談に全て応じる「福祉総合相談窓口」、川越市とハローワークが一体的に相談に応じる「川越しごと支援センター」などが入居。さらに、これらの相談や手続きに訪れる

川越市

市 政 ル ポ

(埼玉県)



川越の農業を支える天然の沼・伊佐沼は新たな観光の目玉としても要注目の存在

子ども連れの方が安心して利用できるよう「キッズルーム」も設置されている。中でも注目されるのが「福祉総合相談窓口」内に設けられた「川越市子育て世代包括支援センター」の機能だ。

ここには母子保健コーディネーター、子育て支援コーディネーター、保育コンシェルジュが常駐し、妊娠中や子育て中のあらゆる悩み相談に応じてくれるほか、窓口で解決できない相談があれば、各種の支援機関や専門家へとつないでくれる。転入者が多く、地縁を持たない子育て世代が増えつつある現代の環境下にあつて心強い、川越市における子育て世代の「ワンストップ型」よろず相談窓口といえる。

いわゆるワンオペ育児が一般化しつつあるような風潮が蔓延する^{まんえん}現在、こども医療費の支援、保育施設の拡充など、制度的な各種支援策の整備に加え、こうした直接的な触れ合いを介しての相談機能が、便利な駅前^{駅前}に設けられていることの意義は大きい。

「川越駅西口周辺地区の再開発は川越市の新たな玄関づくりともいえる事業で、平成26年3月の駅前広場改修を皮切りに、平成27年春には埼玉県・川越市・民間事業者が共同で整備した「ウェスタ川越」(市のコンサートホールや生涯学習施設などが入居)をオープンしています。今年できたユープレイスの各種相談機能やしごと支援センターは、ウェスタ川越に設置してあったもので、それをより駅に近いユープレイスに移転した形になりました(川合市長)

川越市では平成31年4月に児童発達支援センターを別地区に設置しているが、子どもの発達に関する悩みを持つ子育て世代にとって、より相談のしやすいユープレイスの窓口を通じて、児童発達支援センターにつないでもらう事例が増えていくのではないだろうか。

さらに令和3年度には、本川越駅の近くにも保育機能や子育て支援機能、地域包括支援センターの機能を持つ「子育て安心施設」を整備する。同施設の特徴は保育ステーション機能。保育の利用に係る送迎に困難を抱える家庭の利便性の向上と、子育てをする家庭に対する支援の推進を図るため、送迎バスな

どで児童の送り迎えを行う予定だという。

来夏には、東京2020オリンピックのゴルフ競技が、川越市内にある霞ヶ関カンツリー倶楽部で開催される。新型コロナウイルスの影響で「川越まつり」(ユネスコ無形文化遺産)の今年度分開催(10月17・18日)が中止になったのと同様、残念ながら予断を許さないが、準備は着実に進められている。これまで見てきたように、中心市街地が重伝建地区という稀有な土地柄を持つ川越市では、市制施行100周年を目前に未来志向のまちづくりが各分野で多彩に進められている。今後の推移が、さらに注目される。

(取材・文：遠藤隆／取材日令和2年6月30日)



East Courses No18 : Photo by Koji Aoki/AFLO

東京2020オリンピックのゴルフ競技が開催される霞ヶ関カンツリー倶楽部
(写真提供：霞ヶ関カンツリー倶楽部)